

## 8. 黒崎町の白山神社と祭り

鈴木 隆

- I はじめに
- II 白山神社の祭り
- III 例大祭の風景
- IV 考 察
- V おわりに

### I は じ め に

黒崎町は、加賀市大聖寺という市街地から海へ向った、多少離れた場所に位置し、思っていたより人通りも少なく、どこともなく静かな町、という印象を受けた。主に、中高年の人たちに話を聞いたわけだが、ことお祭りの話をする際、その人たちは顔に笑みを浮かべながら話をするのだが、その反面さびしい内容の話をされる時もあった。他の有名なお祭りとは異なる、いわゆる「集落の祭り」とはどういうものか興味を持ち、聞き取りを進めるうち、神社と祭りの密接な関係が明らかになってきた。大きなお祭りでは、参加する人は様々だろうが、こういった小さな地区の祭りに参加する人はどんな人で、何を行うのか、人々にとって祭りと神社はどのような意味を持っているのか、このような事をふまえながら本稿を記そうと思う。

以下では、IIで神社と、神社における祭りの行事、その他神社関係の行事の特徴を、IIIではその祭り行事の中の例大祭を挙げて詳しく述べ、IVで前述したような疑問に対して考察し、感想をVで述べようと思う。

### II 白 山 神 社 の 祭 り

黒崎町で唯一の神社である白山神社は、集落の北の海よりの、小高い丘の中腹に設けられている。普段は人々があまり訪れることもないこの神社は、祭りとなると重要な位置を占めてくる。

まず最初に白山神社の概略を述べておく。白山神社の創立年代ははっきりしない。祀神は石川県石川郡鶴来町にある白山比咩神社と同じ、菊理姫（きくりひめ）という神である。

黒崎町の神社組織は、氏子総代が1名で、これは年々の区長が就き、神社行事を行うに当たっての責任者になる。また区役員として、相役（区長代理）や生産組合長などを含む8名がおり、神社行事を行う際の準備などを担当している。それに来年区長になる相談役1名を加えた計10名で神社組織は形成され、運営している。また運営費用は区の予算において前もって割り当てられた経費でまかなわれている。

黒崎には常住する神主がいないため、大聖寺から宮司が出張してくる。この人は末社を8～9

社持ち、その中に深田町の白山神社も含まれている。

このような白山神社の1年間に行われる祭りにおける行事を1995年度の例から見ると以下の通りである。

#### 1. 元 旦 祭

その名の通り1月1日に行われる祭り。午前0時から行われ、区役、相談役、氏子総代、自衛消防の人々が参拝し、神事で玉串を奉納する。その際自衛消防の人々がかかり火をたくのが通例である。また、その年に厄を迎える25歳、初老（42歳）の人々は、午前11時からお祓いを受ける。また前日の午後11時ごろから町の人々が初詣にやって来るため、境内にテントを設置し、そこでお守りや破魔矢などを売る。

#### 2. 春 祭

3月1日に行われる祭り。午後4時から始まり、区役、相談役、町議会議員、市議会議員、黒崎小学校校長、JA支所長、氏子総代が参拝、玉串奉納を行う。その神事後、公民館で直会（なおらい。お供え、酒のお下がりを一同で分け食べる宴会。春祭では20名が参加）が行われる。

#### 3. 月 並 祭

5月1日に行われる祭り。午後1時から行われ、区長、相談役が参拝し、玉串奉納をする。

#### 4. 夏 祭

7月1日に行われる祭り。この祭りは春祭とよく似ている。異なるのは参拝する人々が区役、相談役、町議会議員、氏子総代などに限られ、春祭に比べて少ない点である。午後4時から始まり、前述の人々が玉串奉納を行う。神事後、公民館へ戻り、直会（12名参加）が行われる。

#### 5. 例 大 祭

この神社における最も大きな祭りである。獅子舞、子供みこし、輪踊りなど、様々なイベントが行われる。神事は午前9時から始まり、区役、相談役、町議会議員、市議会議員、黒崎小学校校長、JA支所長、氏子総代、水番という最大の人数が参拝し、玉串を奉納する。また他の祭りでは神職は1名だけなのだが、この祭りだけ2名参加する点が異なる。神事後、公民館で直会が行われるが、最大数の22名が参加する。この祭りの詳細はⅢで述べることにする。

#### 6. 神 嘗 祭

10月27日に行われる祭り。午後4時から始まり、区役、相談役、町議会議員、氏子総代が参拝し、玉串奉納をする。その後、直会（12名参加）が公民館で行われる。

#### 7. 秋 祭

12月1日に行われる祭り。この祭りは前述の夏祭と同じ形式で取り行われる。午後4時から区役、相談役、町議会議員、氏子総代が神事で玉串奉納を行い、その後公民館で直会（12名参加）が行われる。

## 8. 大 祓 式

1年のすすを落とす意味で12月31日に行われる祭り。午後1時から取り行われ、区長と相役が参拝し、玉串奉納を行う。

以上の8つが黒崎町白山神社の祭り行事である。またこれらの準備として、神事の際のお供え物の用意、神社の前の灯ろうの点灯、御幕を張るなどが行われる。

これらの祭りは大祭、中祭、小祭の区別があり、大祭は春祭、例大祭、中祭は元旦祭、夏祭、神嘗祭、秋祭、小祭は月並祭、大祓式となっている。これは神事の際のお供え物の数（例えば、小祭では最小限の酒、米、水、塩、中祭、大祭ではこれに加えて、もち、卵、海産物などが加えられる）が異なる点、また神職の服が異なる点、神職が神事の際に述べる祝詞（のりと）が異なる点で区別されている。

元旦祭の厄祓いに関連して厄の祝いについて述べると、五五の祝いと初老の祝いの2つが存在する。五五の祝い（25歳）は親がするもので、親戚を家に呼んで宴会をしたり、もちをついて親戚に配ったりするのが通例である。それに対して初老（42歳）の祝いは本人がするもので、もちを配るのは五五の祝いと同じだが、親戚、知人を招いて温泉、又は料理屋へ行く。また伊勢神宮へ年内、年明けの2回、お礼参りに行ったりもする。加えて25、42歳合同で1月1日のお祓いの後、公民館で直会を行う。神社への寄進は25歳では行われず、42歳になった時、はじめて行われることが多く、その場合、「ツレ」単位での寄進が圧倒的に多いのがこの地区の特色である。

神事に参加する人は皆、正装をしていて、それは神に対する尊敬と受け取れる。参加者はまず公民館に集まり、全員がそろった後、神社へ向かい神事を取り行う。

前に挙げた例大祭を除く祭り（神事）は、参拝する人が特定の役職に就いている人々で、しかもその人々の多くは高齢者であり、男性である。女性が参加するのは初老の祝いでの厄祓いの際、夫婦一緒に参拝する時くらいで、若い人にいたっては五五の祝いの厄祓い以外は皆無である。また高齢者すべてが来るわけでもない。参拝している人々が住民を代表していると考えられる。しかし、このような祭り自体を知らない人も多いのではないだろうか。

よって次のⅢでは、地区の人が大勢参加する、例大祭を取り挙げる。

## Ⅲ 例 大 祭 の 風 景

黒崎町白山神社の例大祭は、毎年9月23日、24日の2日間行われる。この時期、深田の秋の大祭など、黒崎とその周辺地区でも多くの祭りが行われている。黒崎町では1966（昭和41）年ごろまで9月1、2、3日の3日間、祭りが行われていたが、この時期は丁度、稲の収穫期と重なるようになり、また獅子舞を行う青年会の人々は会社勤めなどで、勤務先の休暇等の問題が浮上してきたため、10月1日に一時変更した。しかしこの時期も、平日の場合があり、休暇の問題は解決されず、加えて天候がすこぶる寒い時期にあたり、人々の参加が減少した。これらの理由で

1985（昭和60）年ごろから現在の収穫が終った時期で、加えて秋分の日という祝日を利用した今の日程となった。

例大祭の主な行事は、神事、獅子舞、子供みこし、輪踊り（抽選会）である。獅子舞、子供みこしは毎年出されることになっている。祭りの大まかな流れは次の通りである。1日目は白山神社で神事を行った後、獅子舞と子供みこしが、各家をまわりはじめる。獅子舞は2日間をかけて黒崎の全域を一軒一軒順番に回る。子供みこしは1日目に全ての家を回ってしまう。また2日間とも夜は輪踊りを行い、その際、抽選会も行われる。

次に個々の行事について、1. 神事、2. 獅子舞、3. 子供みこし、4. 輪踊り（抽選会）、5. 家の中の祭り、に分けて述べる。

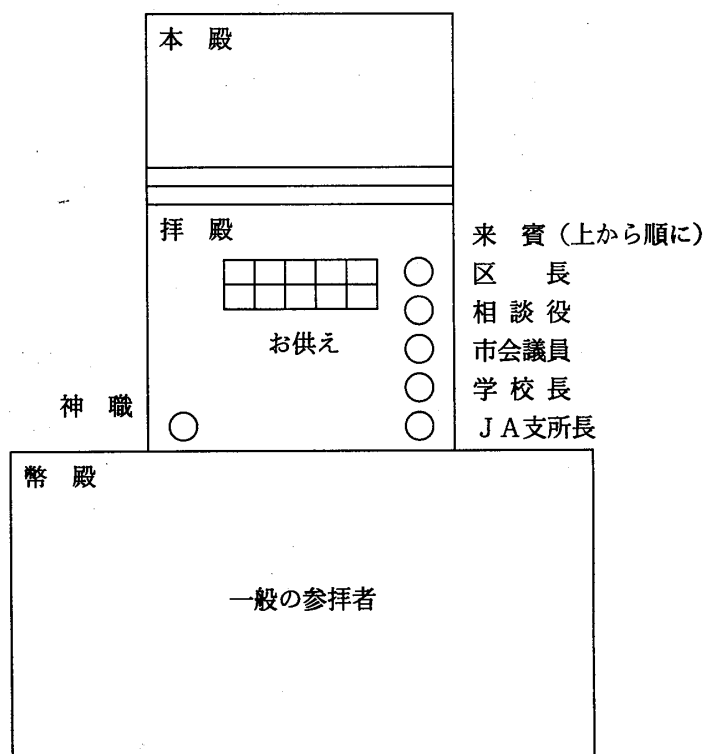
### 1. 神 事

まず普段とは違う白山神社の風景を述べる。神社の入口には青年会によってのぼりが立てられ、またふき流しが子供会によって立てられる。神社の境内には輪踊りの会場となるやぐらが組まれており、神社への道にろうそくが立てられる。

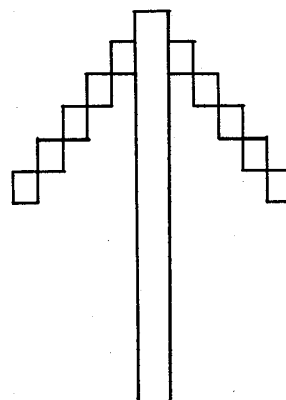
そのような中で神事は、次の順番で、おごそかな雰囲気の中で行われる（参加者の座る位置、宮司の座る位置、また神社内部の配置は図－1参照）。

①宮司が太鼓、笛を鳴らし、神事の始まりを告げる。

②宮司が「お祓い串」（図－2）の前に座り2礼して祝詞をあげ、それを手に取る。



図－1 例大祭での神社内の配置



図－2 お祓い串

- ③宮司がお供え物、来賓、参拝者の順にお祓いをし、お祓い串を元の位置へ戻し、二礼する。
- ④宮司が拝殿の真ん中へ進み1礼した後座る。
- ⑤稚楽（ちがく）とよばれる音楽と共に、宮司が本殿の扉の鍵を持ち、本殿に上がる。
- ⑥「おお」と宮司が大声で言いながら本殿の扉を開け、中にかかっているすだれを上げ、もとの位置へ戻る。
- ⑦稚楽が変わり、宮司がお供え物の酒と水のふたを開ける。
- ⑧稚楽が止まり、宮司が拝殿の真ん中に座り祝詞をあげ、二拍手する。
- ⑨宮司が玉串を神前に置き、二礼二拍手一礼をする。それを拝殿に座っている5人の来賓に宮司が1つずつ手渡す。
- ⑩宮司が太鼓をたたいている間、玉串をもらった人は奉納する。また係の人が幣殿に座っている参拝者に玉串を渡し、それを順に奉納する。
- ⑪玉串奉納が終了すると、太鼓が鳴り止み、次に稚楽が流れ、宮司が酒と水のふたを閉める。
- ⑫宮司が本殿に進み、すだれを降ろし、また「おお」と言いながら扉を閉め、鍵をかける。拝殿の真ん中へ進み一礼。ここで稚楽が止まる。
- ⑬笛、太鼓を鳴らし、全過程の終了を告げる。ここで例大祭の神事はひとまず終る。その後、獅子頭とみこしのお祓いをする。神事中、おごそかな雰囲気だが、終るとそれと相対してリラックスした雰囲気になる。

## 2. 獅子舞

獅子舞の運営には、毎年青年会があたることになっている。青年会は中学校卒業以上（高校生は不可、大学生は可）でほとんどサラリーマンという構成になっている。獅子頭は青年会館に保管されており、それを使っての獅子舞の練習は、青年会に入ったばかりの新人を対象に、青年会長を中心とする年長者の指導のもと、本番である23日の3週間前から青年会館で行われる。その場で黒崎の獅子舞の形式が受け継がれていく。

黒崎町の獅子舞の特徴としては、囃し方は笛、太鼓（大太鼓、小太鼓）で構成され、また獅子舞の際、棒ふりがなく、ぼたん振り（獅子頭のみが囃し方の音に合わせて激しく動く）だけで、これは深田町の獅子舞とは大きく異なる点である。棒ふりは、昔やっていたなくなった訳ではなく、はじめからない。

獅子舞は神社でお祓いを受けた後、各家を回るのだが、その巡行には順番があり、1日目（23日）はまず黒崎の区長宅、次に相談役宅、区役8人の家とつづいて、その後、黒崎町中を6つに分けた内の1、2、3組を、そして2日目（24日）はその残りの4、5、6組を、そして昔は出村（でむら）と呼ばれた黒崎町から少し離れた家1軒を回り、終了する（図-3参照）。この順序は「町くずし」と呼ばれ、町会の名簿の順番と一緒にしているのが特徴である。また、獅子宿と呼ばれる、獅子舞の休憩の場所があり、現在は青年会館を使っているが、それができる以前

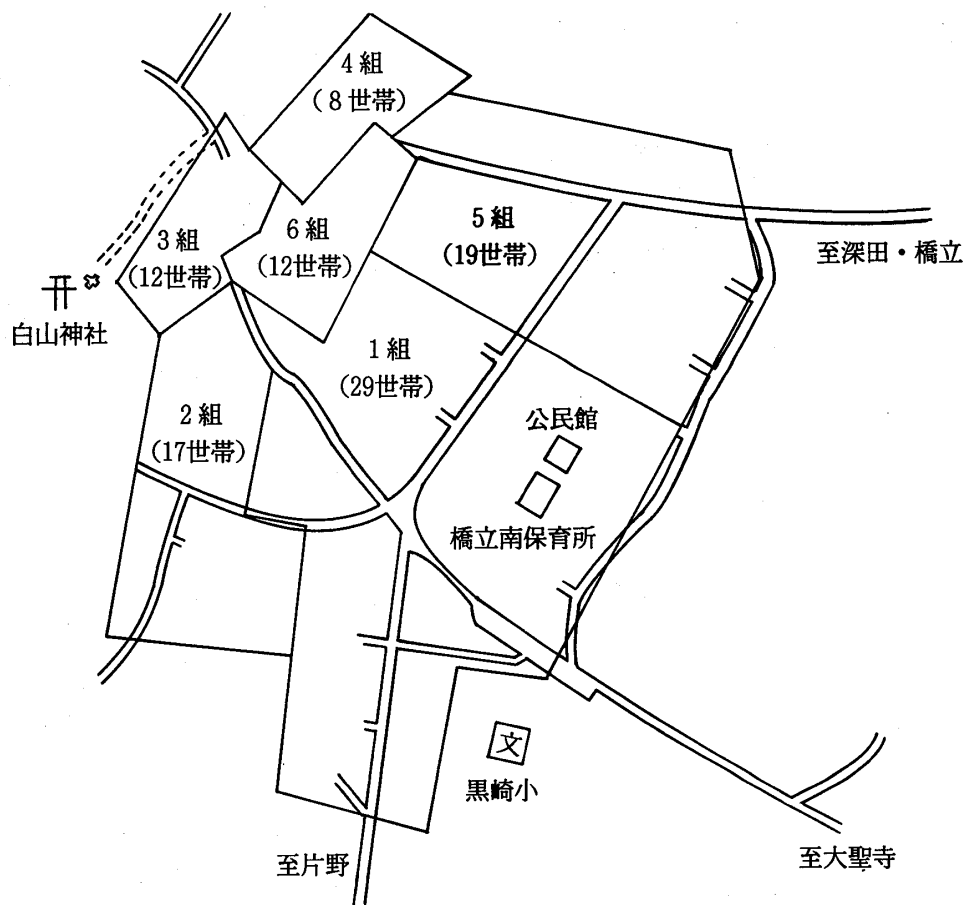


図-3 黒崎町の組

は青年会長宅がその場所になっていた。

獅子舞を回す時間は、1回につき約4～5分で、獅子の中には3人が入る。棒ふりが無い分、迫力が無いかと思いきや、獅子が激しく暴れる姿は迫力十分で、見る者たちを圧倒するものがあった。

獅子舞に対する1戸当りの御祝儀（黒崎町では「花」という言葉は用いない）は平均5000円程である。しかしイエの事情、例えば役職者のイエであるとか、イエに新しく嫁が来た場合などは、御祝儀は他のイエよりは多少、多くなる。またそのようなイエででは獅子舞も2回まわしたりするそうである。

集められた御祝儀は、獅子が破損した場合の補修費用、また、太鼓の皮の張り替え、獅子舞をする時に着る法被を新調したりするのに使ったりするほかは、青年会員の慰労会や一泊旅行をする場合の費用、抽選会の賞品の購入費用などに当てられる。

### 3. 子供みこし

元々、黒崎町にはみこしがなかったのだが、1980（昭和55）年ごろに、主に黒崎、深田、片野の子供たちが通う橋立南保育所の主催として子供みこしができた。そのころは樽みこしであったが、1991（平成3）年ごろに今のみこしに変わった。そのみこしは白山神社の中に保管されている。

本来、保育園主催のものなので、黒崎町内の園児のみの参加だったのが、どうしても人数が少

ないため、黒崎の子供会（小学1～6年生）も参加することになり、現在、運営、主催とも子供会が行っている。

子供みこしは神社での神事の際、お祓いを受け、その時、お札を受ける。そのお札の事を「御守護の札」と呼び、子供みこしが各戸を回る際、そのお札を玄関先にはっていく。このお札は、例えば、交通ルールを守る人を交通事故から護る、守らない人のことは護ってくれない、といった意味づけがなされている。

子供みこしをかつぐのは子供たちだが、各家を回る際、子供会関係の父兄たちが同行する。回る順番は特に決っているわけではなく、1日で町内全てを回ってしまう。昼の休憩は公園でいったん解散し、また集合するという形をとっている。

子供みこしが家を訪れると、その家の人が出てきて、子供たちがみこしをかつぎながら「おみこし、わっしょい（5回繰り返す）、わあ」と元気いっぱい言う。これを各々の家で繰り返していく。

御祝儀は1戸平均3000円ほどで、集まったお金は子供会活動、育友会活動などに使われる。

#### 4. 輪踊り（抽選会）

23、24日の2日間とも、夜の8時30分～10時30分まで輪踊りが行われる。主催は青年会で、協力という形で婦人会も参加している。場所は神社境内前に設置された、赤と白の幕の張られたやぐらとその周辺である。以前は夕方から夜中の12時過ぎまで行われていたが、1976（昭和51）年ごろから短縮され、2時間だけとなった。歌を歌える人が音頭を取り、太鼓で伴奏する。踊りの種類は越中おはら節と佐渡おけさである。今は踊る人は少なくなってしまったが、それでも婦人会の人々を中心に150人程の人が参加する。

そしてこの踊りの2日間、抽選会というものがある。これは1980年代後半にはじまったものである。以前は仮装大会が行われたりした。青年会が今年はどちらをやる、ということを決めるのだが、ここ2、3年は抽選会が行われている。各世帯は2日間のそれぞれに1枚の抽選券をもらい、抽選会で当たると賞品がもらえるというものである。この賞品は主催が青年会なので獅子舞の御祝儀より出されている。この行事は輪踊りに参加する人が減少したため、人集めの策として行われているものである。

#### 5. 家の中の祭り

1986（昭和61）年ごろまで、ほとんどの家で赤飯を炊き、それを親戚一同に配ったそうである。しかし現在ではそれをする家は少なくなってしまったが、数軒だけは昔ながらに続けている、とのことである。

昔から祭りの当日は各家で宴会が開かれるのが通例である。今では町の外へ出て行く人も多いので、その人たちを含む親戚一同が集まって大宴会になる。料理は、大量に必要なことと、調理の手間を省くため、仕出し屋からオードブルを取り寄せる場合が多いそうだ。

#### IV 考 察

黒崎町の住民にとって神社と祭りとはどのような意味を持つのだろうか。

まず神社であるが、定期的にお参りをする人がいない、また例大祭を除いた祭りには黒崎町の役職者しか参加しない点から、白山神社そのものは、氏子である住民の日常生活には、あまり浸透していない、という印象を受ける。よって町内の住民にとって白山神社とは、その町の氏神としての信仰の対象となっている、というよりは、神への感謝を表す寄進を「ツレ」単位で行うことによる、住民のつながりを象徴する存在ということが言えるのではないだろうか。

次に祭りであるが、3つの意味が考えられるように思う。

1つ目に宗教的なものとしての祭りである。白山神社とその住民を氏神と氏子の関係として考えると、祭りとは、神を祀り、神への感謝や、神への信仰を表す儀礼だと考えられる。農作物や海の産物で生活していた昔には、そのような考えが根底にあったであろうが、現在ではそのような考えは人々にとってあまり重要なものではなくなってしまった。

そこで、地区内の人々のつながりを強化する祭りという意味が挙げられる。例大祭を例に述べると、町内における様々な組織が参加する。そして例大祭を成功させるには、各組織の中、または各組織間でいろいろな交流をし、うまく進めなければならない。その際、1つの祭りを成功させる、という統一した目標の中で連帯感というものが生まれるのではないだろうか。そして祭りが終わった時、その連帯感、その町への帰属意識が強固になったことを感じられるのではないだろうか。祭り当日、獅子舞やみこしが全戸をまわり、そこで御祝儀が出される。加えてみこしでは子供を意識的に組み込んでいる。このような部分が住民の連帯感を強くする、良い例のように思われる。

もう1つ、住民が楽しむイベントとしての祭り、が挙げられる。抽選会での賞品への期待、輪踊りに参加する楽しみ、獅子舞で集まったお金を使つての慰労会への楽しみ、人それぞれに楽しみがあるだろう。また、今日はお祭りで無礼講だからといって、昼間から堂々と酒を飲んだりできる。日常の中の楽しみとは違った、非日常的な部分も人を魅きつけるのではないだろうか。楽しみが無ければ、祭りというイベントもただの義務的な仕事のように感じられ、ちっとも面白くないだろう。祭りは人々が楽しむもの、楽しいもの、という思いが、今日でも祭りを維持している最も大きな理由のように感じる。

これらのことから、黒崎町にとって神社、そして祭りは、一つの共同体の中にいるという意識を認識し、またその意識を強いものとするために必要なもので、この先もずっと維持していかなければならない、と言える。

#### V お わ り に

調査の聞き取りで次のようなさびしい意見も聞かれた。「若い者の参加が少なくなってきた」



とか、「昔はよく踊りに出かけたが、最近あまり行かなくなった」などである。たしかに昔に比べて現在、マスメディアの発達、交通機関の発達が進み、これらのことによって情報があふれ、行動範囲が広くなり、また若い人たちが村から外へ出て行く、といった条件が、祭りへ参加する人の減少を引き起こしているように思われる。住民、特に若い人にとっては、「集落の祭り」というものは、さほど重要なものでは無くなってきているのかもしれない。青年会へ入会する人が少ないことが原因で、年齢上限が25歳から35歳へ引き上げられたことが、祭りの参加者減少の問題を切実に表していると思う。

最後に黒崎町から県外の大学に行っている若者の言葉を記す。「私は大学を卒業したらまた黒崎に戻ってくる。こんなに空気のうまい場所は都会では考えられない。」このような故郷に愛着をもつ若者が、黒崎町だけでなく全国の集落すべてに必要なのではないだろうか。